

研究題目

草創期の幼稚園教育における豊田英雄の理論と実践

心理・教育学専攻 人間教育学コース  
4608002 清水 陽子



## 目 次

序章	1
1 本研究の課題	
2 先行研究の検討	
3 研究の方法と論文の構成	
第1章 草創期の東京女子師範学校附属幼稚園と豊田英雄	4
第1節 草創期の東京女子師範学校附属幼稚園	4
1 附属幼稚園創設の経緯	
2 附属幼稚園開設当初の主な教員と保母	
第2節 最初の日本人保母 豊田英雄	8
1 豊田英雄の生い立ちと幼稚園保母になるまで	
2 女子教育への志	
第3節 松野クララの保育方法の伝習形態と内容	11
1 伝習形態	
2 伝習された保育内容と方法	
第4節 豊田英雄筆記「代紳録」	14
1 三冊の「代紳録」の内容の構成	
第5節 附属幼稚園の保育内容にみる フレーベルの幼児教育	18
1 附属幼稚園規則にみる保育内容（明治9（1876）年11月制定）	
2 附属幼稚園規則にみる保育内容（明治10（1877）年7月制定）	
3 二つの附属幼稚園規則の比較にみる松野クララの伝習の影響	
第2章 豊田英雄筆記「代紳録」にみられる 松野クララの幼稚園教育論	27
—明治9（1876）年11月6日 ～明治10（1877）年3月17日の受講記録—	
第1節 子ども観及び幼児への教育方針	28
1 子ども観	
2 幼児への教育方針	
第2節 子どもの遊びと援助方法	31

1	遊びと目的	
2	自然物に触れる教育的意義	
3	幼児と環境	
4	援助方法における留意事項	
第3節	幼稚園教育の役割と恩物の教育的意義	34
1	幼稚園教育の役割	
2	心の教育—畏敬の念の育成—	
3	恩物の教育的意義	
第4節	教授方法の特徴	37
1	「代紳録 一の浄写」にみられる教授内容	
2	「代紳録 全」にみられる教授内容	
3	「代紳録 二」にみられる教授内容	
第3章	豊田英雄の幼稚園教育の実践的展開	
	—「代紳録」から「恩物大意」へ—	52
第1節	「恩物大意」の構成と内容	52
1	「恩物大意」の構成	
2	「代紳録」と「恩物大意」の比較	
第2節	鹿児島女子師範学校附属幼稚園の開設と 保育実践の特徴	59
1	鹿児島女子師範学校附属幼稚園の開設	
2	東京女子師範学校附属幼稚園と 鹿児島女子師範学校附属幼稚園の比較	
3	鹿児島女子師範学校附属幼稚園の保育の特徴	
第3節	鹿児島女子師範学校附属幼稚園 保育見習科における保姆養成	67
1	保育見習科規則からみた保姆養成	
2	豊田英雄の保姆養成の特徴	
第4章	豊田英雄の幼児教育理論の形成	73
第1節	イタリアでの教育・保育調査と視察	73
1	イタリアへの渡航と滞在記	
2	女子教育施設の視察報告	
3	幼児保育施設および小学校の施設報告	
4	豊田英雄がイタリア視察から学んだこと	
第2節	「代紳録」から「保育の栞」へ	76

- 1 保育内容と方法の拡充
- 2 「保育の葉」にみる豊田芙雄の保育者論

終章 豊田芙雄のフレーベル幼児教育理論  
の受容と展開 …………… 86

あとがき

年表

現代語私訳と資料 1 「代紳録 一の浄写」

資料 2 「代紳録 全」

資料 3 「代紳録 二」

# 序 章

## 1 本研究の課題

明治初期に始まった日本における幼稚園教育の導入は、文部大輔田中不二麿と東京女子師範学校摂理中村正直の尽力によるものである。田中不二麿は、東京女子師範学校の摂理に中村正直を抜擢し、明治9（1876）年11月16日に東京女子師範学校附属幼稚園開園が実現した。

中村正直は幼稚園教育の理念を紹介し、幼稚園の普及に努めた。中村は「フレーベル氏幼稚園論の概旨」の中で、幼児は「人の苗」であり、幼児期は人間として育つ萌芽の時期であって、良い教育を授けることで、幼児の「自然の性」が自由に発達するような機会を造る必要があることと、幼児の「天性」の開発のために組織的な集団保育としての幼稚園が有効であると幼稚園教育について論じている<sup>1)</sup>。中村の幼稚園構想に基づき、附属幼稚園の監事関信三は、アメリカの幼稚園教育の文献を翻訳し、『幼稚園記』（明治9年）の著書を発表した。それ以前に出版されたフレーベルの幼稚園教育の文献は、桑田親五訳『幼稚園』上巻（明治9年）一冊であった。明治9（1876）年11月に、ドイツ人の主席保姆松野クララが附属幼稚園に着任し伝習が開始されるまでは、豊田たち日本人保姆は、この2冊の文献を読んでフレーベルの保育方法を手探りで学んだと考える。

関信三は松野が日本人保姆たちに保育方法を伝習する際の通訳を務め、実際的な保育内容や方法の導入にも貢献した。その松野の講義を、豊田は3冊の「代紳録」と命名した資料に残している。豊田の記した著述物としてよく知られているのは、「恩物大意」と「保育の栞」である。この二冊は作成年が記されていないため、資料の位置づけが明確にできなかったが、本研究で着目した「代紳録」は、松野の伝習の期間と教授した内容が明確であるという意義を有する。本研究では、「代紳録」を中心に「恩物大意」と「保育の栞」の内容分析や、東京女子師範学校附属幼稚園や鹿児島女子師範学校附属幼稚園における教育実践の検討を通して、①草創期の幼稚園教育の内容や方法の拡充および展開の実態を明らかにすること、②豊田英雄の事例から保育者が幼児に適した内容や方法を選択し実践することを通して、幼児教育の理論と実践の形成過程を具体的にとらえることを課題とする。

## 2 先行研究の検討

草創期の幼稚園教育や豊田英雄に関する研究は、『日本幼児保育史』第一巻（日本保育学会編）、『日本近代教育百年史』（国立教育研究所）、『幼稚園教育百年史』（文部省）、『幼稚園の歴史』（津守真、久保いと、本田和子）をはじめ、通史的な幼児教育史研究の中で論述されている。その中でも『日本幼稚園成立史の研究』（湯川嘉津美）は、「恩物大意」に着目し、「球」から「碁石」までの十六種の「恩物」の紹介と、「用法」として「針画」から「模型法」までの九種があげられていることを指摘し、松野クララがゴルダマー（Goldammer, H.）の方法を保姆たちに伝授したと論述している。その後、豊田が鹿児島女子師範学校附属幼稚園を開設した際に、二十恩物を導入し

たことについても言及しているが、それは『幼稚園法二十遊嬉』（関信三）の影響であるとの指摘で、豊田の保育内容や方法の拡充および展開についての検討はされていない。

草創期の幼稚園教育に貢献した人物を中心とした研究では、『中村正直の教育思想』（小川澄江）、『日本幼稚園史序説 関信三と近代日本の黎明』（国吉栄）等がある。『中村正直の教育思想』の中で、本研究で着目した豊田英雄については、松野クララと共に東京女子師範学校附属幼稚園の教育を担っただけでなく、草創期の幼児教育界のリーダーとして活躍したことが記されている。

『日本幼稚園史序説 関信三と近代日本の黎明』では、豊田英雄が明治10（1877）年に、東京女子師範学校附属幼稚園において「幼稚園記」の講義を担当し、松野クララや関信三と共に保姆養成に貢献したことが記されている。また、最初の松野クララの伝習についても論述し、松野はピアノ演奏の教授ができたにもかかわらず、豊田たちにピアノの指導をしなかったことや、唱歌の導入に関与しなかったこと、関信三が式部寮雅楽課の伶人に音楽唱歌の作曲を依頼したのは、関が讚美歌の影響を排除したかったため、西洋音楽の導入を拒否した結果であるという新しい見解を述べている。国吉は、松野クララの伝習および初期の保姆養成の状況について関を中心として描いているため、伝習された方法や内容について、伝習を受けた保姆の視点から検討したい。

松野クララ研究では、平成22（2010）年に出版された『松野礪と松野クララ—林学・幼稚園教育事始め—』（小林富士雄）が、クララの夫松野礪関係の資料を使用して、クララの生涯についても詳細に記している。同年に発刊された『豊田英雄と草創期の幼稚園教育』（前村晃、高橋清賀子、野里房代、清水陽子）は、豊田英雄のライフヒストリーを中心に草創期の幼稚園教育の実相を詳しく描いている。この著書の中で、前村はフレーベルの幼稚園教育理論が定着していく様子を恩物と保育唱歌を中心に解明し、「代紳録」や「恩物大意」、「保育の栞」の性格や位置付けについて言及している。この点が、これまでの研究にはない新しい視点である。また、前村は松野クララの「英文テキスト」による伝習についても指摘しているが、具体的な文献名については言及していない。

前村の豊田英雄に関する関係論文<sup>2)</sup>では、幼稚園の開設前後の状況を豊田英雄に関する新資料を使用し、豊田が東京女子師範学校に着任することになったいきさつを、中村正直と根本正の關係に着目し考察している。

そこで本研究では、「代紳録」の分析を通してさらに、先行研究の課題や検討不足の諸点を指摘する。具体的には伝習された方法や内容について、伝習を受けた保姆の視点から検討し、松野の伝習と豊田の幼稚園教育の実践と理論形成の関連について言及したい。言い換えれば、豊田が松野クララから学んだゴルダマーの恩物用法とその後の実践への展開について検討を加える。また、関が考案したといわれる「恩物」等保育に関する用語についても、「代紳録」の分析を通してさらに検証を進めたい。

### 3 研究の方法と論文の構成

本研究では、明治9（1876）年から明治23（1890）年までの豊田の教育活動に関する資料を研究対象とする。中でも3冊の「代紳録」は豊田英雄が松野クララから学んだ幼稚園教育を、豊田

自身が保育の実践を通して自分の理論を形成し、その後松野に代わって豊田が見習生に幼稚園教育理論や保育法を教授するための講義ノートとなった。

前述の①、②の課題を解明するために、主として東京女子師範学校附属幼稚園規則、鹿児島女子師範学校附属幼稚園規則、「代紳録」と「恩物大意」、「保育の栞」の比較検討により分析を行う。

第1章の第1節～第4節では、先ず東京女子師範学校附属幼稚園草創期の経緯と豊田英雄の保姆教育の根幹をなす契機となった松野の伝習の実像について述べる。第5節では、仮定の幼稚園規則（明治9年11月制定）と幼稚園規則（明治10年7月制定）を比較し、松野の伝習が草創期の附属幼稚園に与えた影響を明らかにする。

第2章では、豊田が筆記した松野の幼稚園教育理論について検討する。「代紳録 一の浄写」には子ども観や幼児への教育方針、子どもの遊びと援助方法等が記されている。*Der Kindergarten* (ゴルダマー)の序文『幼稚園と幼児の遊びの意義』(Marenholtz-Bülow, B.B)と比較し、マーレンホルツ・ビューローと松野の幼稚園教育の近似点について述べる。次に、ゴルダマーの恩物の用法と比較し、松野が伝習の際に拠り所とした「英文テキスト」について解明する。

第3章では、「代紳録」と「恩物大意」を比較することで、豊田の幼稚園教育の方法の特徴について論じる。その後、鹿児島における幼稚園での実践と東京女子師範学校附属幼稚園との実践を比較し、保育方法および内容の変容と拡充について考察する。

第4章では、「代紳録」とイタリアでの保育・教育視察後に書かれた「保育の栞」とを比較し、豊田の幼稚園教育理論の形成の過程について論述する。

終章では、豊田英雄のフレーベル幼児教育理論の受容と展開について総括する。

尚、史料の引用は原則として原文の通りとしたが、旧字体の漢字は新字体に改め、合字は開いた。また、読み易さを考慮して、句読点を加えた。

---

1) 「フレーベル氏幼稚園論ノ概旨」『同人社文学雑誌』第5号 六～八丁 1876年9月16日

2) 「豊田英雄と草創期の幼稚園教育に関する研究(1)～(6)」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第12集 第1号他 2007年～2008年

# 第1章 草創期の東京女子師範学校附属幼稚園と豊田英雄

明治9（1876）年に創設された東京女子師範学校附属幼稚園は、文部大輔田中不二麿と東京女子師範学校摂理中村正直の尽力によるものであったといわれる。小学校教育もまだ定着していない状況の中、近代国家への道を歩み始めた日本にとって、行政が幼児教育をリードしなければ幼稚園の開設は不可能であった。

本章では、幼稚園教育の草創期にあつて、最初に保姆となった豊田英雄を中心に附属幼稚園創設のために尽力した人々について論述する。次に、松野クララから伝習された幼稚園の保育方法に焦点をあて、豊田英雄筆記の受講ノート「代紳録」について解説する。やがて、この「代紳録」は受講ノートに終わらず、豊田英雄が保姆見習生に伝習する際の講義ノートとしての役割も果たすようになる。松野クララが教授した幼稚園教育の理論及び方法は、豊田らに受け継がれ定着していく。そして、その伝習の影響は、正式制定された附属幼稚園の幼稚園規則にみることができる。松野クララの伝習の影響を実証するために、仮定の幼稚園規則（明治9年11月制定）と幼稚園規則（明治10年7月制定）との比較をし、松野クララの保育方法の特徴について考察した。

## 第1節 草創期の東京女子師範学校附属幼稚園

### 1 附属幼稚園創設の経緯

明治7（1874）年1月4日、文部大輔田中不二麿は、女子師範学校創立の伺書を太政大臣三條實美に提出した。設立の趣旨としては、「女子の性質」が教育者として適任であることと、「幼稚を撫養する」役割があることの二つであった。田中不二麿は、明治4（1871）年11月から約1年4ヶ月間、文部省理事官として欧米の教育事情を視察した。そのことが後の附属幼稚園開設の構想となったことは、『日本幼児保育史』第一巻<sup>1)</sup>等先行研究で記されている通りである。田中不二麿は、明治8（1875）年7月7日に附属幼稚園開設の儀の伺いを提出したが許可されず、同年8月20日に再応伺を提出した。結果として、附属幼稚園は9月15日に、文部省から設立許可の布達が出されるという経過をたどった。同年、東京女子師範学校摂理に就任した中村正直は、附属幼稚園の開設に尽力し、幼児教育を実践するための適任者の人選を進めた。そして、監事に関信三、主席保姆に松野クララ、保姆に豊田英雄と近藤濱が登用された。附属幼稚園の園舎は、明治9（1876）年に建築の意匠などを設定し、同年11月に竣工した。園児七十五名を迎え、東京女子師範学校附属幼稚園が開園されたのは、竣工間もない11月16日だった。開園翌日の「読売新聞」第547号は、当時の幼稚園の状況を「女教師は子どもの気の向いたやうに遊ばせながら物を教えますが、一中略一 女教師もまだ日本の事情を知らず、何しろ始めてすることゆえ、まづ三四ヶ月生徒を教へて見た上でなければ規則や等級もわからず、いづれ三四ヶ月たちましたら、本当の開業式があつて定めて盛大になりましやう」と書いている。この記事からは、まだ規則もクラス編成も定まっていなかった開園式時の附属幼稚園の様子を知ることができる。女教師とは松野ク



ララのことだが、この記事が示す通りこの時松野は来日して日も浅く、日本の幼児の実態をほとんど知らなかった。松野クララがドイツでは経験したことのない大人数の幼児の集団に対して、幼児の主体性を尊重した遊びを通しての教育をするという方法で保育をすることに無理が生じたと考える。そのため、園児の募集は当分の間差し止められることになった。同校第一回卒業生であった青山千世は、保姆数に対し園児数が多かったため、東京女子師範学校の生徒三、四人が、裁縫の時間に附属幼稚園に保育の手伝いに行っていたと当時のことを語っている<sup>2)</sup>。つまり、附属幼稚園開園に向けて幼稚園規則は作成され、幼稚園の一日の生活の枠組みは決まっていたが、実質的な幼稚園の内容や方法は未定の状況であった。

## 2 附属幼稚園開設当初の主な教員と保姆

附属幼稚園開園当初の保育内容を創り上げることに貢献した四名について、豊田との関わりや附属幼稚園で果たした役割を中心に論述する。

### (1) 東京女子師範学校摂理 中村正直

中村正直は、天保3（1832）年5月26日に、二条城交番同心中村武兵衛重一の長男として生まれ、十七歳の時に昌平坂学問所寄宿寮に入寮し、朱子学を学んだ。慶応2（1866）年、中村は、三十五歳の時に幕府遣英留学生取締として十二名の留学生を引率し、イギリスに留学した。明治元（1868）年パリを発し、6月25日横浜に到着した。この留学で得た知見を元に、中村は、啓蒙思想家として国民教育論を展開し、明治教育史上、女子教育や幼児教育、障害児教育などの分野で先駆的な役割を果たした教育者として位置付けられている。幼児教育においては、中村が『母親の心得』<sup>3)</sup>に記した「母親之心得序」から、母親の幼児への感化力の大きさを認識していたことは明白である。また、中村が母親の影響の重要さと母親教育の必要性を認識していたことは、明治8（1875）年3月16日の明六社定例会における「善良ナル母ヲ造ル説」の演説の中で、母親の役割と幼児の教育の重要性について述べた内容からも窺い知ることができる。

次に、中村の幼稚園教育の構想についてである。明治初期におけるフレーベルの教育理論は、中村が紹介した「フレーベル氏幼稚園論ノ概旨」が、『幼稚園』（ドゥアイ著）と『フレーベル及び幼稚園』（ペイン著）の二冊を翻訳し、まとめたものであると湯川は考察している<sup>4)</sup>。中村は「フレーベル氏幼稚園ノ概旨」に於いて、3歳以上の幼児は、集団で教育を受けることがよいとのフレーベルの説に賛同している。このように幼児の集団教育施設を構想した中村は、キリスト教的思想に基づき、神を敬い人を愛することを説いた「敬天愛人説」を提唱した。以上のことから、中村はキリスト教を基盤とした幼児のための集団教育施設の教育的意義を認め、幼稚園開設の推進役となった。中村が近代国家にふさわしい新しい国民意識を形成しようとした教育活動の背景には、キリスト教的な人類愛の思想があったといわれるが<sup>5)</sup>、幼児期の教育機関として附属幼稚園開設を構想していたと考える。附属幼稚園開設後、中村は保姆となった豊田に「愛敬歌」を贈った。豊田も中村に鹿児島へ出立する前に、「拝神の辞」をかい添削を依頼している。この一事から、豊田がキリスト教に基づく保育思想の感化を中村から受け、神への畏敬の念を持っていたことがわかる。明治24（1891）年6月7日、中村は東京女子師範学校長在職中に死去した。

## (2) 東京女子師範学校附属幼稚園監事 関 信三

関信三は、天保 14 (1843) 年 1 月 20 日、三河国幡豆郡一色村の真宗大谷派の安休寺に生まれた。関信三については、前述の『日本幼稚園史序説 関信三と近代日本の黎明』に詳しく記されているが、その著によると、大谷派の京都高倉学寮で学び、広瀬淡窓の咸宜園で研鑽した。明治 4 (1871) 年 11 月頃に太政官直属の諜者となり、安藤劉太郎と名のつて、横浜で諜報活動をしていた。安藤は、明治 5 (1872) 年 2 月 2 日、宣教師バラから受洗した九人の日本人の一人となった。この時、安藤はバラの英語学校の生徒であり、日本基督公会の創立メンバーの一人であった。諜者としてキリスト教とのつながりを持った安藤は、プライン、クロスビー、ピアソンの三人の婦人宣教師とも交流があり、居留地に開設された混血児の救済をするためのアメリカンミッションホーム(亜米利加婦人教授所)で、中村正直と出会っている<sup>6)</sup>。中村と関にとってアメリカンミッションホームで三人の婦人宣教師と出会ったことが、最初の幼児教育との出会いとなった。

明治 5 (1872) 年 10 月 19 日、関は海外事情視察のために東本願寺法嗣現如が洋行するにあたって随行を命じられ、イギリスに約二年間滞在し明治 7 (1874) 年に帰国した。

帰国後は非常勤の英語教員として、東京女子師範学校に雇われた後、附属幼稚園監事に抜擢された。関信三に依頼された英語の幼稚園文書の翻訳の仕事は、中村正直が紹介したドゥアイ(Douai, A.)の『幼稚園』(*The Kindergarten*)を完訳することであった。この書は創設期の幼稚園教育の指針となり、当時の附属幼稚園の保育見習生たちは、『幼稚園記』(明治 9 年)から幼稚園教育について学んだ。附属幼稚園でドイツ人の主席保母クララ・ジッテルマン(Zitelmann, 後の松野クララ)を雇うことになったが、伝習は英語で実施されたため、関信三が通訳を担当した。続いて、関信三は、『幼稚園記附録』(明治 10 年)、『幼稚園創立法』(明治 11 年)、『幼稚園法二十遊嬉』(明治 12 年)を著した。関信三は前述の『幼稚園創立法』の中で、二十恩物は幼稚園の保育内容の中でも重要であり、遊びながら自然と幼児の知的発達を促進する知的教育の第一歩として、最も適した方法であると述べている<sup>7)</sup>。関信三は、幼児は遊びを通して学習し、学習の一つの方法として恩物を使用するという考え方を持っていた。関は、その優れた英語力を駆使して海外の幼児教育に関する文献を訳すことで、保育内容や方法を紹介し、豊田たちに影響を与えた。関信三の翻訳は、訳語の選択や文章の加筆、削除、誤訳、楽譜の削除など関自身の価値観が強く現われていることを、国吉は指摘している。つまり、日本のフレーベルの幼児教育思想は、関信三というフィルターを通して受容されたといえる。関は病弱であり、豊田が鹿児島で幼稚園開設のために出張中であった明治 12 (1879) 年 11 月 4 日に亡くなった(死亡年月日は墓石による)。

関は、幼児に適切な環境を与え、幼児の自発的な遊びを通して教育が行われることにより、人類の幸福に寄与するという幼稚園像を抱いていたが、これはアメリカの博愛主義による幼稚園運動が目指していた方向性と同じであり、幼児期の人間形成における重要性を認識していたと考えられる。

## (3) 同園主席保母 松野クララ

松野クララは、ドイツ人の女性であり、ベルリンで生まれ育った。旧姓はクララ・ジッテルマン(Clara Zitelmann 1853 年 8 月 2 日生—1941 年)<sup>8)</sup>である。明治 9 (1876) 年 8 月 14 日、フランスの郵船タナイス号で日本に來日したのは、クララが二十三歳の時であり、明治政府の官吏

であった松野礪と結婚するためであった。婚約者の松野礪は、明治3（1870）年に渡欧し、ベルリン郊外にあったエーベルスワルデ森林アカデミーに入学した。松野礪は、明治7（1874）年にベルリンの St. Jacobi 教会で、クララとその姉のマリーの立ち合いのもと洗礼を受け、キリスト教徒となった。礪はその翌年の明治8（1875）年8月8日に帰国している。クララはその約一年後来日し、木戸孝允の紹介により、明治9（1876）年9月26日より翌年1月までの約束で、東京女子師範学校の英語教師となる。

しかし、クララが英語だけでなく、フレーベルの幼稚園教育の方法を知っていることにより、東京女子師範学校附属幼稚園の主席保母として採用されることになった。クララがどこで保母養成の教育を受けたかは不明である。明治9（1876）年11月6日から、クララが英語で保育法を話し、関信三が通訳する「幼稚園伝習」が始まった。クララは附属幼稚園開園の約一ヵ月後の12月17日に、静養軒で松野礪と結婚披露宴をしている。そして、翌年10月12日に、女兒文を出産した。クララは私生活においても結婚、妊娠、出産、子育てと附属幼稚園開設当初の時期に、多忙な生活を送っていた。

附属幼稚園の開設を機に、その後いくつかの県が幼稚園に関心を持ち始めたが、その中でも大阪府は特に熱心で、明治11（1878）年2月に、府費による保母見習生の氏原銀と木村末を派遣してきた。同年3月に、横川榎子も保母見習生として選ばれ、附属幼稚園では各地の要請にこたえての保母養成事業が開始された。しかし、クララにとっては、第二期生ともいえる保育見習生達への伝習は、前述したような多忙な事情により、休講が多かったといわれている。

明治12（1879）年、クララは宮内省式部寮雅楽課四名（芝葛鎮 東儀季芳 奥好義 小篠秀一）を教える最初の官雇いピアノ教師となった。伶人たちが附属幼稚園園児に「唱歌伝習」をしていたこともあり、同幼稚園にてクララがピアノ演奏の教授をした。伶人たちのピアノの授業は一ヵ月の内十回（一回の授業は一時間）で、月謝は二十円であった。幼稚園の一台のピアノでは足らず、練習用に三條實美邸のピアノを使用したといわれる<sup>9)</sup>。

クララは、明治13（1880）年2月に幼稚園の主席保母を辞職し、3月からは員外保母となった。その翌月から、文部省体操伝習所でピアノ奏者として勤務し、ピアノ技術の伝習に貢献したと評価されている。松野クララが残した幼児教育関係の資料には「婦人のつとめ」（松野久良々演述「独逸学協会婦人懇親会講演録」1888年）と、「小児養育実験之説」（松野久良々述「三條家文書」）がある。

#### （4）同園保母 近藤濱

近藤濱は、天保10（1839）年2月に、松前藩江戸藩邸で生まれた。豊田より六歳年上である。女子師範学校が開校され、寄宿舎の舎長として採用された時は、三十六歳であった。

豊田と一緒に松野クララから最初の伝習を受けた二人の日本人保母のうちの一人である。『保育唱歌』の中には、豊田と共に近藤が作詞したものも多く、「山時鳥」（明治12年9月13日）、「山家」（明治12年11月）、「四季」（明治12年12月9日）、「花見ノ駒」（明治13年5月20日）等の歌がある。明治11（1878）年3月、保母見習生制度による授業が開始されると、近藤は豊田と共に、「手技製作」の講義を受け持つようになる。

近藤は、和歌、英学、洋算、漢籍を学んだ、当時としては教養の高い女性であったといわれて

いる。明治14(1881)年10月、近藤は附属幼稚園を退職したが、明治16(1883)年に松平忠恕たち五名で共立幼稚園を設立し、生涯幼稚園教育および保姆養成に貢献した。

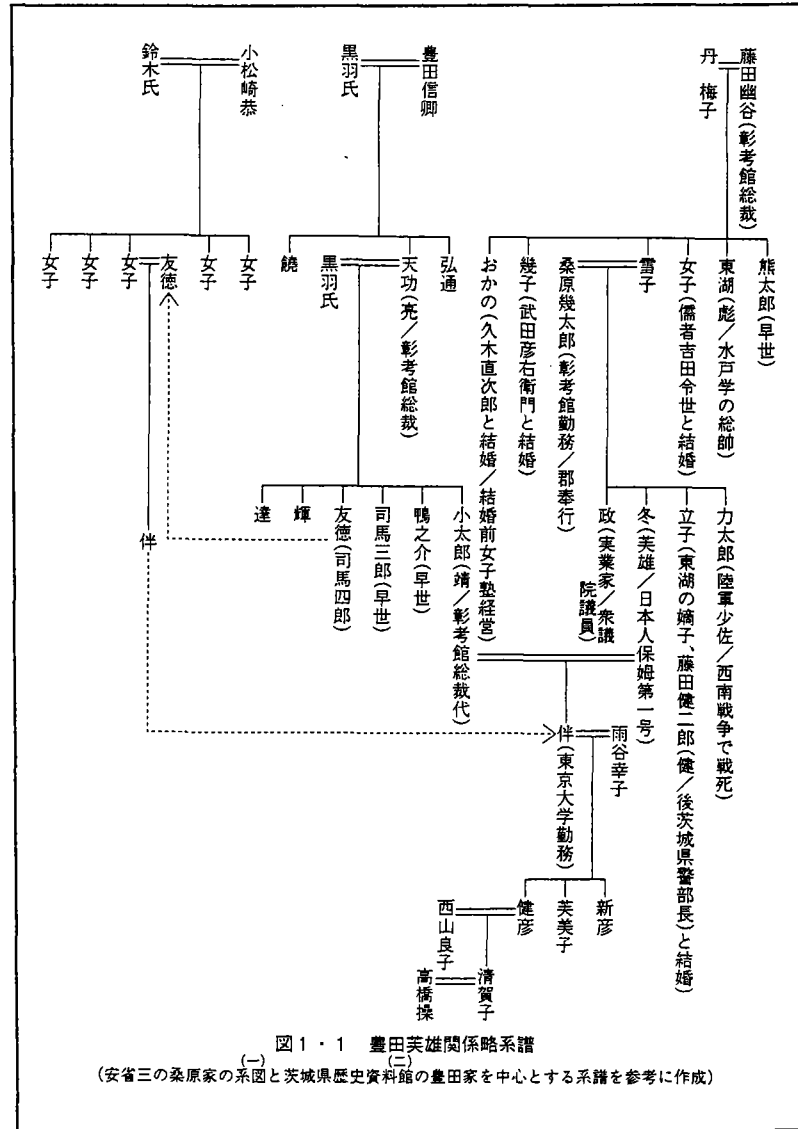
## 第2節 最初の日本人保姆 豊田英雄

### 1 豊田英雄の生い立ちと幼稚園保姆になるまで

豊田英雄は、弘化2(1845)年10月21日、水戸藩士の父桑原幾太郎と、母雪子の五女(桑原冬)として生まれた(図1「豊田英雄関係略系譜」参照)。英雄は十八歳の時、後に彰考館総裁心得となる豊田小太郎と結婚する。英雄の夫小太郎は、水戸藩の儒学者であった父豊田天功と共に、「大日本史」の編纂や蘭学修行を藩から命じられた。小太郎は水戸藩の勤皇精神と進歩主義的な考えを併せ持っていた。結婚の四年後に、夫小太郎が京都で暗殺されたため、夫の弟の遺児(当時五歳)を嗣子として豊田家を守り、私塾を開き女子教育の道を志す。未亡人となったのは、冬が二十二歳の時のことであり、その時に英雄という名前に改称したと言われる。英雄は夫小太郎の遺志を継いで、和漢洋学を修めて女子のための家塾を開いた。

その後、豊田英雄は発桜女学校の教員として教鞭をとっていたが、明治8(1875)年11月20日、茨城県より辞職が承認されるとすぐに上京した。同年11月25日、東京女子師範学校出校の通知を受けとり、翌々日に教員試験を受けて、28日に東京女子師範学校の読書教員として任命された。東京女子師範学校では、漢学・歴史・地理を担当する。約一年後の明治9(1876)年10月12日に、本校訓導のまま、附属幼稚園保姆の辞令を受ける。松野クララが主席保姆として着任する一ヶ月間は、訓導としての仕事をしつつ『幼稚園』や『幼稚園記』等の文献を手がかりに、幼稚園教育の勉強をした。同年11月6日から松野クララの講義をうけ、同年11月16日幼稚園が開業された。

図1  
 豊田英雄関係略系譜  
 「第一章 豊田英雄の  
 生い立ちと結婚と  
 学問修行」前村晃  
 前掲『豊田英雄と  
 草創期の幼稚園教育』  
 (P. 4) より抜粋



明治11(1878)年3月からは、三名の保姆見習生を受け入れたため、豊田たち日本人保姆が保姆養成においても、この時期から指導的立場になる。豊田は松野クララが担当した「保育法」と同じ科目である「幼稚園記並に保育法」の授業を氏原たちに教授することになった。豊田英雄は松野クララから伝習された内容を確実に教授しようと、何度も松野の伝習の受講ノートを清書したと考える。

明治12(1879)年2月に、鹿児島からの要請を受け鹿児島女子師範学校附属幼稚園開設のため、約一年四ヶ月の期間出張する。豊田は藤田東湖の姪であり、学問好きの少女であったといわれるが、自分が保姆養成の時期に学んだ内容を丁寧に書き残している。特に、松野の伝習は翻訳文であったため、繰り返し推敲した跡も「代紳録」には残されている(表1「豊田英雄の残した著述物」参照)。

## 2 女子教育への志

明治13(1880)年6月、豊田は鹿児島での幼稚園開設と保姆養成の仕事を終えて、帰京した。

豊田が鹿児島を離れる日には、幼稚園関係者や園児、保護者等多くの人々が見送りに来たという。帰京後の明治 18 (1885) 年 3 月、豊田は幼稚園保育法と家庭科教員免許状を取得し、9 月に東京女子師範学校助教諭の辞令を受けた。翌年の明治 19 (1886) 年まで、豊田は東京女子師範学校及び附属幼稚園の職務を続けた。同時期に、東京女子師範学校の旧職員と共に、女子職業学校 (現・共立女子学園) の発起人となり、囑託として舎監を任された。豊田にとって、女性の自立のために職業学校を開設することは、本格的な女子教育への志の現われであったといえる。

明治 20 (1887) 年から 3 年間、旧水戸藩主徳川篤敬がイタリア公使として渡欧するにあたり、豊田は総子夫人のお相手役として随行することになった。帰国後の豊田の教育活動の概略を、次に記すことにする。明治 27 (1894) 年 4 月に、小学高等科卒業程度の学力を持つ女子を対象として、家事整理等実用のための高等の学科を修めるという目的で、寄宿舎方式の私塾翠芳学舎を開いた。翠芳学舎が軌道に乗った頃、文部大臣西園寺公望から宇都宮女学校の再建を依頼された。同時に栃木県尋常師範学校教諭も兼任し、宇都宮で約六年間を過ごした。明治 34 (1901) 年豊田五十七歳の時に茨城県立水戸高等女学校教諭として赴任し、同年に『女子家庭訓』(上下) を出版している。この書には、女性にとって必要な教養の修め方、育児の方法、夫や家族に対する態度、看護や育児の方法等家庭の管理全般に渡る女子のための修養論が書かれている。前述したように、この書には幼児教育に関する記述があり、大人の言葉や行動が幼児に与える影響の大きさについて述べられている。

豊田英雄は、七十八歳まで水戸高等女学校講師の職にあった。昭和 16 (1941) 年、九十七歳の時に水戸の自宅でその生涯を閉じた。

表 1 豊田英雄の残した著述物

著述物の作成年	著述物の名称	著述物の性格	作成場所
明治 9 年 11 月 4 日—明治 10 年 3 月 17 日	「幼稚園日録」	61 日分の松野クララの伝習の記録 (日記)	東京女子師範学校附属幼稚園
明治 9 年 11 月 4 日—明治 10 年 3 月 17 日	「幼稚園聞書稿」	松野クララが英語で口授した幼稚園教育の素原稿であり、伝習の一部のみ現存する。	
推定 明治 12 年	「代紳録 一の浄写 幼稚園教育理論 松野クララ口授聞書」	「幼稚園聞書稿」を浄写し、豊田の保育に関する考察も記されている。	同上
明治 10 年 3 月 8 日—明治 11 年 3 月 1 日	「代紳録 全」	松野クララからの伝習聞き書きノート	
明治 12 年 1 月 22 日	「代紳録 二」	松野クララからの伝習聞き書きノート	
推定 明治 10 年代後半	「恩物大意」	明治 9 年から 10 年にかけて書かれた「恩物法原書」を基に書かれた。	

明治12年11月25日	「代紳録 三」	講義ノート ※内容が未確定のため本稿では取り上げない。	鹿児島女子師範学校附属幼稚園
明治13年5月18日	「代紳」	鹿児島を離任する前に書き置きした保育の備忘録	
イタリア視察から帰国後（推定 明治20年代後半）	「保育の栞」	幼児教育理論	東京女子高等師範学校
明治34年3月10日	『女子家庭訓 上下』	女子の修養論（教養の修め方、育児の方法、家族に対する対応、看護の基本等）	水戸

### 第3節 松野クララの保育方法の伝習形態と内容

#### 1 伝習形態

最初に、ここで使用する「伝習」について定義しておきたい。『日本国語大辞典』（小学館）によると、「伝習という意味は、学問や技術を師から教えられて習うこと。また、習ったことを受け伝え、さらに他人に教え学ばせること」と記されている。つまり、伝習には保育理論や実践方法を習い、それを他の見習生に伝えるという二つの目的があり、教授とは異なる指導形態を含む言葉として使用されている。それは、実際の幼児の反応から指導法を見つけて学ぶという幼児教育の独自性によるものであり、保姆が幼児と関わる姿をみて、保育方法を学びとる要素を含む。

フレーベルは、恩物の使用法や保育の実践的知識を養成学校の生徒に口伝方式で教授したため、「生徒たちのノートや覚書・フレーベルとの書簡の中に実践的な手引きが記され、口伝方式はルイゼ夫人やミッデンドルフによってフレーベルの死後も養成学校で続けられていた」<sup>10)</sup>。松野の伝習においてもこの方法がとられたと考える。

松野による最初の講義は、東京女子師範学校附属幼稚園の開園十日前の明治9（1876）年11月6日である。その後は附属幼稚園での保育を行いながら、実践とほぼ同時進行で実施された。豊田が残した幼稚園日誌「幼稚園日録」には「伝習の行われた場所、その日の天候と温度、来訪者の名前、伝習を受けた者の名前」<sup>11)</sup> など事務的な記述のみで、保育内容そのものは一切記されていないことや、伝習を受けたのは豊田英雄、近藤濱、山田、大塚の四人の名前が記録されている。来訪者には、摂理中村正直、太政大臣三條實美等の氏名が記されている。上記の記録は、いわゆる業務日誌的な内容であり、松野クララに関しても、「先生来ル」「クララ氏昇園」「傳習アリ」と、何種類かの記載があり、松野が概して二つの役割を果たしていたことが窺える。一つは、主席保姆としての保育の監督・指導の役割であり、もう一つは保姆養成の講師としての役割である。松野の伝習が開始した十日後、保育実践も併行するという状況で実施された伝習のスタイルは、次

の二つに分けることができる。

①幼稚園の保育中に保姆が幼児に関わりつつ、松野から助言を受けて学ぶ参加学習スタイル。

②松野が英語で保育法を話し、関信三が通訳する講義スタイル。

①は幼稚園の保育時間中、松野自身が恩物を使って日本人保姆たちに、子どもと関わる松野の姿を見せたり、ピアノをひいて遊戯の指導の援助をしたり、一緒に遊戯の輪に入って遊んだりする実地保育の指導スタイルである。松野が幼児と一緒に唱歌遊戯に加わり指導する際に、中村正直の娘たかや、勝海舟の娘目賀田夫人が英語の通訳をした<sup>12)</sup>。武村耕靄筆「幼稚鳩巢戯劇之図（複製）は「家鳩」の遊戯図である。上の洋装の外国婦人が松野クララ、右婦人が近藤濱、下方婦人が豊田英雄といわれるが、ピアノを使用せず、唱歌だけで遊戯をしている。



武村耕靄筆

「幼稚鳩巢戯劇之図（複製）

前掲『豊田英雄と

草創期の幼稚園教育』（表紙）

より抜粋

②の講義は、明治9（1876）年11月から明治10（1877）年3月17日までの四ヶ月十日間に渡り、六十一回実施された。この講義数の内訳は、11月は十七回、12月は十四回、1月は十二回、2月は十四回、3月は四回である。したがって、松野クララの教授方法は、日本人保姆と共に保育をする中での指導や、保育時間以外で保育方法を口授する等様々であった。松野が日本人保姆にピアノの演奏法を教えたという記録はないが、豊田はピアノの鍵盤や音階等を筆記し、「旅人」や「民草」等の数種類の唱歌を記したノートと共に保管していた。これは松野がピアノを保育に使用していた姿をみて、豊田が保育におけるピアノ演奏を学習する必要を認識し、主体的に学習していたためと考えられる。